

Title	鳥弋山離へのみち
Sub Title	Road to the district of Wu-i-shan-li (Alexandria)
Author	松田, 壽男(Matsuda, Hisao)
Publisher	三田史学会
Publication year	1971
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.44, No.1 (1971. 11) ,p.1- 24
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集東西交渉史
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19711100-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19711100-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 烏弋山離へのみち

松田壽男

前嶋信次君は私の同級の友である。昭和三年の春に東京帝国大学を卒業するさい、共通の恩師藤田豊八先生のお勧めもあって、彼は西アジアから東に向って研究を進め、私は中国の西北角から中央アジアへ、つまり西方を向いて論文を書いた。したがって東洋文庫で一つの本を使いあったことも、たびたびであった。その友が、戦前は台北帝大に、そして私は京城帝大に奉職し、戦後は彼が慶応へ、私が早稲田へと、肩をならべて齡をとってきたのも、全くの偶然とは思われない。いまその前嶋君が定年で慶応の教授をやめられるにあたり、私が記念論文をものするとは、実に感慨ひとしおである。そのような感慨も手伝って、私の心のなかのわだかまりを披瀝したり、慶応とは無縁の行事をからませたりしつつ、次に拙文を綴る。友に語る気持からと考えていただきたい。

現在、シルク・ロードというコトバが流行している。それこそ猫も杓子でもある。おそらく、未知の国土をのりこえて……といったロマンティズムがそうさせたのであろうが、学問的に使われているとはいえない。もともとこのコトバは、中国の西北部（陝西・甘粛・青海）とパミールの西側の多くの市場町とを結んでいた砂漠の道、つまりターリム盆地の諸オアシスを貫通していた東西交通路を指したものである。この道が中国特産の絹を西方に運んでいたことは確実であるが、

時代的には古代に限られていた。というのも、この道には年代的に盛衰があり、また蚕糸の法はかなり早く西方で模倣され、かつ中国式の文様が必ずしも歓迎されたとはいえないからである。保柳睦美博士が、このような点を詳考して、シルク・ロードというコトバの野放図な使用に反撥しているのは、もともといわなければならぬ（「シルク・ロードの地理学的諸問題」地学雑誌・七一巻五―六号および「シルク・ロードに関する三つの著書」地学雑誌・七六巻二号）。かつ、シルク・ロードをターリム盆地の道と解するならば、ロードという英語がそれほど不自然に感じられない。しかしこれを中央アジアから西方に延長したり、あるいは北方のステップを通過していた東西交渉路、ないし南方の海上に見られた沿岸航路にまで該当させるのは無理である。というのも、それらの地域あるいは海域では、必ずしも常套の行路が限定されていたとは思われないからである。私が東西交通路また東西交渉線に対して、しばしばステップ・ルート、オアシス・ルート、そして海上ルートの三者を数え、それらをロードと呼んでいないのは、その意味にほかならない。

それゆえに、もし学問的に広義に使うならば、シルク・ロードは東西交通路または東西交渉線としなければならないが、同時に、東西交渉という用語の受取られかたにも問題がある。それは、このことから当然生起する東西文化の交流にのみ焦点がしぼられがちだからで、文化交流の基本、たとえば、どのようなルートを経由しているか、またどのような事情で文化交流が起ったか、などの問題に一般の関心が低いのは全く不思議ではないか。「賞味」ならば、あるいは砂上の楼閣で事足りるかもしれない。しかし、およそ学問という形にのせるならば、鹿を追って山を見ない猟師になってしまう。交渉の基本問題をはっきりと擱んだ上で、文化の交流を扱わないと、単なる皮相面の感嘆にすぎなくなるのではないか。

私は「文化はラクダの背に乗って」というコトバをよく使う。甲地と乙地との間に文化が交流するのは、その前提として商品の交換によって表示される交渉の事実があり、その交渉、ないし物資の交換は、それぞれの生活者の生活形態を地盤としている。まして乾燥アジアの文化交流を考えるには、隊商の往来から問題にすべきであるという意味に受取ってほ

しい。人間は大地に立っている。そのように歴史の動きは、地上で展開し、それぞれの生活の上にもりあがっている。生活のちがいはそれぞれの社会に異色を与えるだけでなく、人たちの動きを大きく方向づける。そこに、風土というコトバが歴史の基本として見直されるべき理由がある。

このような考えで、私は東西交渉を歴史的に扱いつつある。だから、問題は実におびただしく山積している。シルク・ロードそのものであったと見られる西域の南北道は、現在ことさらに「鉄のカーテン」で障られているが、パミールの西側でも、その憾みが多い。というのも、この方面には、部分に対する個別的な業績は数々あっても、それらを総合する段階には、程遠いからである。そのような学問的事情のうちに、このたび早稲田大学ではパキスタン、アフガニスタン、イランへの学術調査隊を企画し、私には隊長に推されるといふ運命が訪れた。周知のようにこの方面には、フランス、イタリア、イギリスなどの探検がしばしば行われている。また最近では日本も参加して、東京大学や京都大学がかなりの成果を齎している。その間に早稲田大学がはいりこんで、少い資金をやりくりして業績らしいものを挙げるとなると、とても従来のような調査方法はとれない。しかし考えてみるともうひとつ都合なことがある。それは従来の調査がアフガニスタンやイランの北部に偏し、南部にはイタリアの考古学者の団が点々と足跡を印しているにすぎないことであった。早稲田大学が「二番煎じ」の評を避けるためには、問題の地域の南部を対象とする以外にはないのではないか。これが隊長としての私の着眼であった。とくに従来の学術探検には、文化交流の基本問題が等閑視されてはいまいか。この点から、私はもういちど中国の古代史籍を吟味しなおすことによって、隊長としての難関を切りぬけようとした。そこに浮かびあがってきたのが、表題に掲げた「烏弋山離へのみち」であった。

## 二

烏弋山離という四字の国名は、アレクサンドリア Alexandria の訳といわれる。この説はずいぶん古くから西洋学者の間に信用され、祖述されてきた。ところが白鳥庫吉博士は、烏弋と山離とを別々な国名とする説を立て、烏弋はアラコシアの頭音、山離はドラングアナの略訳と主張した（「罽賓国考」）。また藤田豊八博士はこの四文字を、ヘルマンド河下流路の南に横たわる一大湖床ガウド・イ・ジラー Gaud-i-Zirreh の訳名と見る（「条支国考」）。しかし私の考えからすれば、この両博士の説は、西洋学者の通説に対して、ことさら異説を唱えたとは思われない。やはり、烏弋山離はアレクサンドリアの訳とすべきである。ただしその位置については、一般に信ぜられているカンダハル Kandahar（アレクサンドロポリス）ではなくて、むしろこの町より三六六キロばかり北に位するガズニ Gazni（アラコシアのアレクサンドリア）に宛てるほうが妥当のようである。

この道を「罽賓・烏弋山離道」として始めて紹介したのは、実に前漢書の西域伝であったが、後漢書の西域伝になると、この道の終点として条支国を挙げている。ところがこの条支国の位置についても異説がすこぶる多い。その一々を列挙する必要はないが、もしこの罽賓・烏弋山離道をイラン南道とする私の説が成立するならば、藤田豊八博士がいみじくも条支国をブシル港に比定された考説が絶大な立場を占めてくる（「条支国考」）。ブシル（アブー・シヤフル）がファールス地方の外口で、ペルシア湾（緑海）に臨んでいることは、いうまでもない。さらに、この南道がインド大陸を走る部分としての罽賓国については、白鳥庫吉博士が在来のカシュミル説を排し、前後の西漢書に記された罽賓国をガンダーラを中心とするインダス河上流地区にあたと主張された説が想起されてよい（「罽賓国考」）。

罽賓・烏弋山離・条支の三国に関する私の考えは、今回の早稲田大学学術調査の報告書に絶対のものであるから、委細

はそれに譲って、ここでは結論だけを記すにとどめる。そしてこの論考では、この道つまり「イラン南道」が、どのように中国の道つまりシルク・ロードに結びついていたか、中国側からすれば、この道の出発点がどうなっていたか、その問題にしばって、私の着想の概要を以下に記しておく。

この考えに明確なスタートを与えてくれるのは、前漢書の西域伝である。とくにこの伝の皮山国の条に

西南は罽賓・烏弋山離の道に当る。

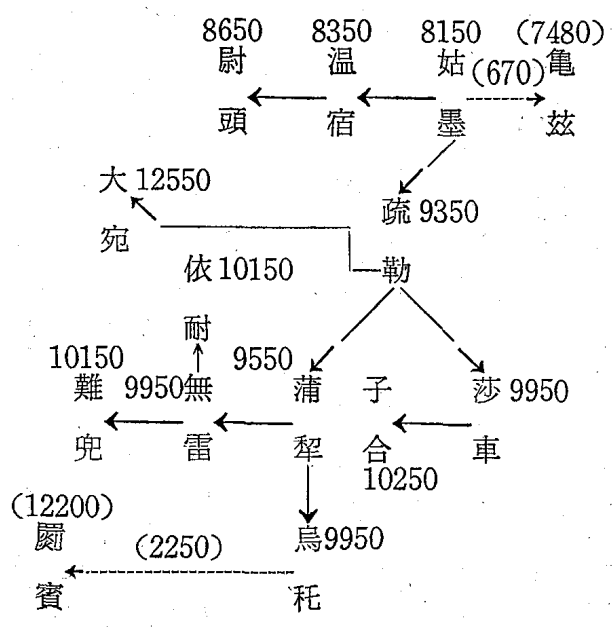
とあって、問題の道は皮山国で西域南道と直結していたことがわかる。現在の中国ではコータン（和闐県）の西のグーマのオアシスに対して皮山県の称を用いている。これは正しい比定である。というのも、前漢書西域伝には于闐（Khotan）の西三八〇里に皮山国ありとし、一方、皮山から西北に莎車国（Yarkand）に三八〇里とあるから、この国は于闐と莎車との中間にあり、東西ほぼ等距離に位したと思われるからである。ことに皮山国は、西域北道の姑墨国（Aksu）に至る一四五〇里、かつ、南は天篤に接すると報ぜられている。天篤は明かにインドである。一般に史記や漢書ではインドを示するのに身毒の訳字を使っていて、天篤・天督は異字訳と認められるが、このように天篤という異字訳でインドが伝聞されていること自体が、異種の報告であり、皮山から直接に山越えてインドへの道が通じていたことを、或人が現地を知って報告したもの、つまりローカル・ニュースの片鱗が正史に残存したことになる。また同伝の子合の条には、東は皮山に、南は烏秣に接すると書いてある。しかし皮山の条では、子合との関連を示さずに、かえって烏秣への里数を挙げている。皮山から烏秣へ直通する道があったことは、疑いを容れない。したがって、皮山・子合・烏秣の三国は、三角形を描いて存在していたと考えなければならない。この皮山・烏秣間の通路こそ、罽賓・烏弋山離道の東端をなす部分と思われるが、これを証明する前に、葱嶺（パミール）を通過する道について考えておく必要がある。

前漢書の西域伝は、この種の史書の常として、コマギレ史料のツキハギと見て取扱わねばならないが、とくにその各国

に掲げてある里数表示には、若干の異った里程表が使用されている点に注目される。まずこれを大まかに見ても、長安を基準とした表示（長安里数）、西域都護府を基準にした表示（烏墨里数）、陽関を基準とした表示（陽関里数）、さらに各国間の区間を測った里数表示（区間里数）がある。このことだけでも、西域伝の編集にあたって、長安の中央政府に残された里程表、西域都護府が作製した里程表、その他多くの里程表が使用されていることを明白にする。しかも、各里程表は、けっして一系のものではない。一連の里程表と思われるものなかにさえ、異った報告が混ざっているから、その取扱いは、慎重を要する。私はこの点を前著「古代天山の歴史地理学的研究」で指摘し論証したが、同時にこの著作中で、漢代の人たちが一日の行程を百里としたことが、里数表示にみごとにあらわれている点にも注目した。某地から某地まで何日かかるといった旅行者の報告に基き、この何日を一日百里の割で乗じ、里数を計算して表記するという方法である。むろん半日間は五〇里となっている。西域南道の山寄りに偏した副道として、且末・小宛・戎盧の三国を結ぶ道にはその好例があり、前著ですでに紹介した。また里数表示の一位の数字に〇以外の数字があるばあいは、どこか一ヶ国の里数がそうした端数を持ち、それが基準となって里程表が作製されていると見なければならぬ。その好例を私は天山東部に見出して紹介した。

私の前著に掲げておいた論証が、幸にも大過がないならば、前漢書の西域伝中に夥しく見出される里数表示は、一切白紙にかえして、改めて論証しなおさねばならないことになる。不遜ない方ではあるが、前漢書西域伝を基にした証議のすべては、再吟味を要するし、その前漢書西域伝こそは、シルク・ロード問題の基本になっているのである。私がこのたびアフガニスタンおよびイランの調査を命ぜられ、この学術調査隊の目標をたてるにあたって、烏弋山離道の解明を看版にした理由は実にこの点に基いている。

手前味噌はこのくらいにして、葱嶺道に関する私見から述べてゆきたい。まず私は、前漢書西域伝の問題の部分に、末尾に「五〇里」という数字をもつ国々が多いのに注意する。これらの国々を各国伝に見える方位指示を参考しつつ並べてみると、次の表が得られ、しかも矢印で示した方向に、百里進法に並べてある。これは、姑墨 (Aksu) を基準として一日行程百里として算出した里程表で、しかも多くの報告をバラバラに用いたことがわかる。



竇国条に報告されている烏秣への二二五〇里を加えると、罽賓の長安里数一二二〇〇里となるので、これも表中に書き添えておいた。

とくに葱嶺山中の諸国について、この表と各国の条に掲げてある区間里数とは、けっして一致しない。疏勒・蒲犁間の二〇〇里は、区間里数の五五〇里と大きく異なる。蒲犁・無雷間の四〇〇里も、区間里数では五四〇里である。無雷・難兜間の二〇〇里は、区間里数では三四〇里、無雷・依耐間の二〇〇里は区間里数で五四〇里である。したがってこの表の里数表示は、必ずしも実測の結果ではなく、国々の道順にすぎないが、その基準となった国は明かに姑墨である。それは姑墨の長安里数八一五〇里から、姑兹への区間里数として同じ条に表記されている六七〇里を減算すれば、龜兹国の長安里数七四八〇里を得るところから知られよう。したがって上掲の表中には、龜兹国を加えておいた。また烏秣の長安里数九九五〇里も、決して実を得たものではないが、この数字に罽



このように、一国の長安里数に、隣国までの区間里数を加算して、隣国の長安里数を算出する方法は、とくに西域南道で目につく。このことは、皮山国の長安里数が「五〇里」を末尾にもちながら、前掲の表中に加えられていない理由ともなる。鄯善国の首都扞泥城(Charknik)以遠の部分について、長安里数と区間里数とを表記すると、このカラクリが明瞭になると思う。

鄯善	←	長安を去る	六一〇〇里
		(且末へ七二〇里)	
且末	←	同	六八二〇里
		(精絶へ二〇〇〇里)	
精絶	←		八八二〇里
		(扞弥へ四六〇里)	
扞弥	←		九二八〇里
		(于闐へ三九〇里)	
于闐	←		九六七〇里
		(皮山へ三八〇里)	
皮山	←		一〇〇五〇里

皮山の条には莎車へ三八〇里とあり、加算すれば莎車の長安里数は一〇四三〇里となるはずである。ところが実際は長安里数として九九五〇里が示されている。これは西域北道と南道との区別が莎車(Yarkand)と皮山(Guma)との間で行われていた当時の実情を反映するらしい。当時葱嶺南部の蒲犁、依耐、無雷、難兜などの国々には莎車から入ったこと

は、次のような一系の烏墨里数（都護の治所を去る何里とあるもの）から知られよう。

莎車	四七四六里
子合(西夜)	五〇四六里
蒲犁	五三九六里

前掲の長安里数表で見ると子合が一〇二五〇里なのに、蒲犁が却って九五五〇里で、少なくなっているのは、この長安里数の基本となった報告が、蒲犁へは疏勒 (Kashgar) から行き、子合へは莎車 (Yarkand) から赴いたことになってたからである。後漢書の西域伝に、莎車国が「西のかた蒲犁・無雷を経て大月氏に至る」とあるのが正道であって、烏墨里数が表示する道順こそ大月氏への道、いわゆる葱嶺南道にほかならない。

もちろん皮山からの道（西域南道）は莎車でこの道に合する。このように皮山は、于闐からの西域南道を受けると共に、莎車への道を発していたが、また子合国への道があり、西域北道の要衝姑墨へも直通していた。これを前記の皮山・烏秣の交通路、および天篤（インド）への別道と合わせて考えてみると、皮山こそ西域南道での屈指の六叉地点に立っていたとしなければならぬ。

西域北道で、皮山と同様な要地を占めていたのは姑墨であった。それは前掲の長安里数表に、この国が三本の道を交えていることから察せられるが、この国はまた天山山中の烏孫国への出発点であった。それは烏墨里数を見ればすぐわかるのであって、

姑墨国は都護の治所を去る一〇二二里

烏孫国は都護の治所を去る一七二二里

の両条がそれである。このほか前漢書西域伝に見える諸国に末尾の数字が「二」となっている烏墨里数をもつものは、大

月氏の五翎侯のばあい（これも一系の里程報告である）を除いて、次の如く配列される。

姑墨 都護の治所を去る一〇二一里

尉頭 同 一四一一里

捐毒 同 二八六一里

（休循国へ 二六〇里）

休循 同 三二二一里

（大宛国へ 九二〇里）

大宛 同 四〇三一里

これもまた一系の里程表として何人かの報告に基くが、その基準は姑墨である。このことは前記の烏孫への里程と末尾の数字「一」を共用している点から案じて、姑墨が交通の要衝であって、これに関する都護の治所烏墨城からの里数を報告したものうちに末尾に「一」の数字をもつものがあり、それを基準として他国の烏墨里数が算定されたと認められるであろう。

#### 四

西域北道は、さきほど表示したように、疏勒から葱嶺の北端を越えて、大宛すなわちフェルガナ盆地に達する。この間は西部天山の山中に展開する牧地と葱嶺高原の牧地とが連なる部分で、遊牧民の世界であった。前記の烏墨系里程表中に見える捐毒、休循の二国はその接点に位し、ともに「本と塞種」と伝えられている。前漢書西域伝の捐毒国の条に見える隣国との方位関係はそれを明かにする。ことに「西に葱嶺に上れば休循」であると記されている一文から案ずれば、この

国が拠っていた衍敦谷は、カシユガルのオアシスに流下するキシル・ダリアの上流地区にあたる。休循国がアライ高原に相当することは、諸家の一致した意見であって、この高原を西南に流れているキシル・スウの上源地区で十字路を作るサリ・タツシユ (Sari-tash) 附近こそは、休循国の中心とされる鳥飛谷であろう。

もうひとつこの国の四至で注目されるのは、西北は大宛国に至る九百二十里とあるほかに、西は大月氏に至る千六百一十里とあって、フェルガナ盆地への道とアム河流域への道とがここで分岐していた点である。前漢書の疏勒国伝の末節に「西は大月氏、大宛、康居の道に当る」とあるのは、この事実に基く。西域北道はアライ高原の東端で、フェルガナへの道とアム河本流への道とに分岐していたのである。

パミール高原は、いかに高山が連なっているにも、内部に南北の連絡が存在した。西域南道が通過する無雷、難兜の二国伝にその片鱗をうかがうことができる。無雷国が北は捐毒と、そして難兜国が北は休循と接すると報告されているのがそれである。ところが両国は、その北にあった依耐国とともに、甚だ比定が困難である。この三国は前漢書西域伝に「蒲犁および依耐、無雷の国は、みな西夜の類なり、西夜は胡と異る、その種は羌、氐に類し、行国にして畜に随い水草を逐いて往来す」とあるように、西夜と呼ばれた遊牧民の勢力を構成し、それぞれにその一つの集団をつくって、河谷に放牧していたと思われる。なお同書には西夜国の伝文を「西夜の国王は子合王と号する」と書きだしてある。これが明かに子合国（呼犍谷）の記述であることは前の引用文で明瞭であり、次の蒲犁国の伝に「南与西夜子合接」とある七字は「南は西夜の子合（国）に接す」と訓むべきである。後漢書西域伝の于寘国条に「于寘より皮山を經、西夜子合德若に至る」と書いてあるのも「西夜の子合、德若」とすべきであるが、蒲犁、依耐、無雷、および西夜の類か否か明記を欠く難兜の四国については国名すら見出されない。このことは、後漢書西域伝の編集方針によるかもしれない。というのは、この伝の序語には「いま建武（光武帝の元号）以後で、其事が先者（前漢書）に異なるものを撰し、以て西域伝をつくる」とことわっ

てあるからである。そして、三国時代の魚豢が撰した魏略によれば、疏勒(Kashgar)に併属された国々のなかに、西夜国、依耐国、満(蒲)犁国、億(德)若国の名が、捐毒国、休循国とともに挙げられている。また北魏時代に酈道元が著わした水経注には、難兜、無雷、依耐、蒲犁の国名が記されてはいるもの、おそらく前漢書によって作文したものらしく、河水の源流に関する著者の意見が実状に則していないために、ほとんど物を言う力をもたない。まして後代の記録に見えた無坳の比定に頼ったり、後代の国名(地名)や現代の名称などに類似を求める方法は、紀元前一・二世紀という古さといい、またその後国名が全く消滅している事情からしても、私にはとうてい採用できない。したがって、これら諸国の比定は、あくまでも前漢書の伝文に忠実であり、かつその里程表の構成を根本的に分析して、配列した順序に従うのが当然と心得る。それゆえに問題の葱嶺南端部の二国は、ヒンドウ・クツシュ山脈を越える峠道をもつ点からその位置を推測する以外に方法はあるまい。

私はこのような考えに基いて、無雷国を小パミール(Little Pamir)、詳しくいえばムルグアブ Murg'ab の上源をなす東北流アクスウ Aksu およびパンジア河 Ab-i-Panja 上源をなす西流アクスウ Aksu の両河谷にわたっていた勢力であったとし、依耐国をその西北に置いて、大パミール(Great Pamir)に配する。そして難兜国はカラ・パンジャ(Qala Panja)附近のワーカーン谷と見る。いうまでもなく小パミールは、ヒンドウ・クツシュ山脈東端部に開いた峠道によって、ワーカーンのパミール(Pamir-i-Wakhān)と呼ばれる世界的な大分水嶺の西側をぬけ、フンザ(Hunza)河谷あるいはギルギット(Gilgit)河谷へと南下する道を分かち、一方、東北流するアク・スウ(ムルグ・アブ系)に道を求めればカシュガル河の上源キジル・スウの谷(捐毒)にむかう。また難兜国は、その南屏ヒンドウ・クツシュ山脈中に嶺南のマストウジ(Mastuj)河谷に通ずる峠道をもち、逆にここから北上すればパミール高原の河谷をつたってその中央を抜けている現在の大道が教えるように、アライ高原系のキジル・スウ(休循)に達することができる。

唐僧の玄奘は貞觀十八年（六四四年）にインド遊学の帰途をパミール南部に採り、達摩悉鉄帝国（護蜜すなわちワーカ  
ーン）から波謎羅川（小パミール谷）を経て竭盤陁国（タシユクルガン）にぬけた。彼はワーカーンの首城の昏駄多城で、  
北に道を探って山越えすると尸棄尼国（後述）にゆき、南に大山（ヒンドウ・クツシュ）を越えると南弥国（マストウジ  
河谷）に出る旨を伝えている。この僧よりも約八〇年おくれて、新羅出身の唐僧である慧超は、やはりインドからの帰途  
に胡蜜国（ワーカーン）播蜜川（小パミール河谷）を経て渴飯檀国（葱嶺鎮、タシユグルガン）に至った。そのとき彼は  
ワーカーンの河谷で、その北山のあなたに九国から成る識匿国があり、その王は常に兵人を大播蜜川（大パミール河谷）  
に遣わし、隊商から絹を劫奪させている話を聞いている。藤田豊八博士が慧超伝に注されているように、この識匿は、唐  
書に五識匿に作り、悟空は五赤匿と書いているが、明かに玄奘の尸棄尼であり、パミール高原の中央に遊牧していた一群  
の民にほかならない。前漢書西域伝に報告されている西夜国はおそらくこれと同様の「行国」であった。だから後漢書西  
域伝が「漢書（前漢書）の中には、誤って西夜、子合は一国なりという。今は各自に王を有つ」といっているのは、当然  
としなければならない。だから前漢書が「西夜の国王は子合王を号し、呼犍谷に治す」と書いている呼犍谷は、子合国の  
基地で、西夜王は子合国を支配していたと考えられる。さらに、同書の難兜国の条に、その四至を示したうちに「西は無  
雷に至る三百四十里」とあるが、この文は無雷・難兜の両国に関する伝文と符合しない。例えば長安里数や烏罽里数から  
すれば明かに難兜は無雷の西。かつ無雷が南方では烏耗に通じ、北方では捐毒への道をもつのに対して、難兜は南すれば  
罽賓、北すれば休循となっていて、無雷が東、難兜が西であることを明かにする。したがって、この一節だけでは私意を  
加え、東は無雷に至る（あるいは「西去無雷」）三百四十里の誤りと認める。

## 五

さて、東方から大小のパミール（依耐および無雷）にむかうには、前掲の長安里数によって配列した順序、また烏墨里数から案出した莎車・子合・蒲犁の行程を使ったと考えられる。これは後漢書西域伝の莎車国（Yarkand）の条に「西は蒲犁・無雷を経て大月氏に至る」と見えているのと同じ道とすべきであろう。前漢書西域伝から見て、子合国は西夜王の支配下にあったとする前記の考えはそれを資ける。また同書の莎車国の条に、この国の重臣の官号を掲げてあるうちに「備西夜君」という一称号を見出すが、これはパミール高原の中央部を占めていた遊牧民団（西夜国）の勢力の刷け口がパミールカンドであったことを思わせ、山中への道がこのオアシスから出発していた事実を裏付ける。

では、まず子合国とは現在のどのあたりか。一般にこの国については北魏書の西域伝に「悉居半国は故の西夜国なり、一に子合と名づく、其王は子と号し、呼隗に治す、于闐の西に在り、云々」とあるのを後代へのつながりの史料とし、同伝の別条に載っている「朱居国は于闐の西に在り、其人は山居し、麦あり、林果多し、云々」もまた同じ国とする。したがって唐史に見える「朱俱波はまた朱俱槃と名づく、漢の子合国なり」もまた首肯されている。そしてその位置は、ヤールカンドの南のカルガリーク（Karghalik）オアシスに当るとするのが通説となっている。ただ白鳥博士だけは、漢代の子合をアスガンサル（Asgansal）河の流域とし、南北朝時代の朱駒波、悉居半と混同してはならぬ（西域史上の新研究、一七二頁）と説いている。

ところが、東西の学者が悉居半（朱駒波）国をカルガリークというオアシスに比擬すること自体がすでに甚だ無理である。というのも「其人は山居して」といたと明示があり、子合国の中心も呼隗谷といわれ、けっしてオアシス（城）とは表示されていないからである。つまり子合国、のちの朱居半・悉居半・朱駒波・朱俱波はカルガリークのようなオアシスに

は求められず、むしろその西方の山間に開けた牧地に置くのが当然であろう。それゆえに白鳥博士が子合国をアスガンサル河谷に配したのは、卓見と思われるが、もし博士の考説にヤールカンドからワーカーンへむかう大道上に位置した点を参考すれば、ヤールカンドの西、パミール越えの道がたどるヤールカンド河（一にザラフシアン河）の河筋に求めて然るべきである。おそらくこの河がアスガンサル河を合わせる地点から上流のコスラーブ(Kosrāb)附近にかけての河谷であったろう。

アスガンサル河の発源地帯が軟玉の産地であったことは、白鳥博士（一七三頁）が論述されている。前漢書に「子合の土地は玉石を出す」とあるのがそれであろう。しかし子合国の基地呼隗谷を必ずしもこの地点に置く必要はない。この遊牧民集団の活躍が、玉産地をその勢力圏に、ないしは通商圏に含めていたとして、不都合はないからである。

次に、中国の南北朝から唐朝にかけての史書にあらわれている渴槃陀（漢盤陀）を、コスラーブからさらに上流の、タシクルガン河（ウプラング河）谷にある要衝タシクルガン（Tashkurgan）に比擬することは、いまやほとんど定説化している。唐の政府がターリム盆地に安西都護府を經營したさいに、その有力な一軍鎮として、ここに葱嶺守捉（葱嶺鎮）を配したことは、いうまでもなからう。このタシクルガンに対して、現在の中国では前漢書に見える蒲犁の名を当て、蒲犁県と称している。すでに白鳥博士の論考からも窺えるように、両者を直結させる史料は皆無である。それにも拘わらず、私がこの比定を支持するのは、前漢時代の西域諸国のキメテとなる長安里数、烏墨里数の性格分析によって、浮かびあがった諸国の配置とそれらを結ぶ行路から、妥当と信ずるからである。白鳥博士はわざわざ蒲犁国の位置をラスカム(Raskam)河下流域に求められたが、この河がヤールカンド河の主流に落合うあたりは、むしろ於麴國の位置としてふさわしい。グーマのオアシス（皮山国）から西行して、山中の河谷をたどりつつフンザ河谷へと抜けていく行路上の要地と認められるからである。



於麿国が北魏書西域伝の権於麿国にはかならないことは、すでに先人が考定している。法顕は于闐国から子合国に進み、子合から於麿国に至って隆安五年(四〇一年)の夏坐をつとめ、ここから竭叉国に向った。この竭叉国は、魏略にいう竭石国であり、釈道安が伝えた伽舍羅逝(水経注・河水篇引くところ)であって、それらがタシユクルガンに当ることは、すでに考定がすんでいると認めてよい。水経注に見える岐沙谷もまた同名の異字であろう。白鳥博士は伽舍(竭叉・竭石・岐沙)をトルコ語系のコトバで玉を意味するカーシュ(Kash)、そして羅逝をインド語系のラージャー(Raja)すなわち王と解し、この説も一般に承認されている。ここにインド語系の王を意味するコトバが用いられていることは、おそらく仏僧の術学からであろうが、実にうまい手掛りを残してくれている。釈道安がこの国について、山中の狭小な溪谷に拠りながらも「万国の要道の由らざるなし」としただけに、タシユクルガンは早くから西方商人にとって最大の商品の一つとしての軟玉の市場であり、その商業基地となっていたことを知る。したがってその市場と化していたタシユクルガンの城そのものもまた、インド語系のコトバで城市を意味するプーラ(Pura)の名を附して呼ばれるばあいがあり、それが前漢時代の漢人によって蒲犁と漢訳されたものではなからうか。

では、なぜ法顕は子合国(Kosrab)から直接に竭叉国(Tashkurgan)に向わなかったのか。それは彼の「安居」の關係からであるかもしれない。しかし、別の理由を考えるならば、次のような事情も浮かびあがる。それには仏僧の歷程そのものの性質をよく見極めてみる必要がある。法顕の後輩の玄奘は、トルコ帝国(突厥)の支配者(可汗)に面会して保護を得るために、はじめはクムル(伊吾)から天山山脈の北側に道を探ろうと志していた。ところが西隣のトゥルファン盆地にあった漢人の国(高昌)の王からの要請を受けたために、伊吾からの進路を天山山脈の南側に改めている。さらに彼は、アクスウ(姑墨)からカシユガル(疏勒)を経由するのがインドへの主道であり捷路であることを知りながら、わざわざ天山山脈の西部を越えてスイアブ(碎葉)に至り、可汗に会見しているのではないか。仏僧の行程によっていわゆるシ

ルク・ロードの本筋を求めるのは、たいへん危険といわねばならない。また別に、玄奘が高昌から焉耆（カラシヤフル）に至る間に隊商と伍していた記録、あるいは彼の先輩の惠生が、北魏朝の官吏宋雲に伴われながらも、北魏の官道となっていた河西路を採らずに、吐谷渾の保護のもとに青海路に由って西域南道に届いた事実、などを参考しても、仏僧の旅行ぶりが窺われるであろう。すなわち彼らは、仏僧であったとはいえ、単独の旅を主とせず、多くのばあい隊商に参加するから、彼らの行程は必ずしも主道を直進する形を示していないのである。それゆえに、法顯は子合國まで進んでみたものの鬪賓・烏弋山離道（後述）が便利なることを思つて於麁國に南下して安居した。ところが何かの事情で再び葱嶺南道を進むことになり、竭叉國（Tashkurgan）へと向つたのであろう。

## 六

法顯は、タシククルガンが葱嶺の山中にあって酷寒であり、麦以外の穀なしと伝え、ここから西に向つて葱嶺を越え、雪山を渡つて陀歴に出、臬度を経て烏菟國へと進んだ。烏菟はいうまでもなく玄奘の烏仗那（Udyāna）で、スワート河谷に位置し、陀歴はダレル（Darel）すなわち玄奘のいう達麗羅川に相当する。ここは、ティベットの西辺から西流してギルギット河を合わせたインダス河の本流が、さらにしばらく西流をつづけている部分に、北から流れこむ河の作る谷である。だから法顯がギルギットを経由したことは明白であるが、ギルギット河谷へは、おそらく小パミールから南に折れたと思われる。なお有名な臬度は、彼が陀歴から烏菟に至る間に渡つたインダス河主流の一部と認められる。

彼から二十余年遅れて中国からインドに遊学した智猛（慧皎の高僧伝・卷三）は、于闐から西南に二千里を進んで葱嶺に登り、そこから波淪國に達し、次いで辛頭河（インダス河）を渡つて鬪賓國に到っている。ただし葱嶺山中の記述が省略されているので、詳細は不明である。しかし彼が経た波淪國は、北魏書西域伝の波路、大唐西域記の鉢露羅、唐史の勃

律に同じで、ボロル (Bolor) すなわちギルギット河谷であるから、彼もまた法顯と同様に、小パミールから南にヒンドウ・クツシュ山脈を越えたと考えられる。要するに西域南道もまた、小パミールからワーカーンにかけてのアム河上流地区で、西にむかう本道と南に進んでウジャーナやガンダーラをめざすインドへの道とに分かれていたのである。

シルク・ロードと俗称される西域の南北両道は、ともにパミールを通過し、その山中で二分していたことが、以上のよう確認された。それならば問題の鬪賓・烏弋山離道はこれらとどのような関係にあったか。この道について、私が今まで取扱ってきた結果を要約すれば、

① 鬪賓・烏弋山離道は皮山 (グーマのオアシス) から西南に派出していたこと。

② 烏墨里数から案ずると、この道は皮山 (四二九二里) 烏秣 (四八九二里) と走り、そこから二二五〇里で鬪賓に達していたこと。

③ 長安里数を吟味すると、烏秣は蒲犁 (タシユクルガン) から南下する順序になっている。しかしこの国は北方で子合 (コスラーブ) とも連絡していたし、別に無雷 (小パミール) の南にもあたっていた。とくに子合、皮山と烏秣とは、三角形を描いて位置し、鬪賓・烏弋山離道はいわばその底辺にあたっていたこと。

したがって後漢書西域伝に「皮山より西南し、烏秣を經、臬度を渉り、鬪賓を歴、六十余日の行で烏弋山離国に至る、云々」とあるのは、烏秣という国名を烏秣の誤りと見て、同じ道程と認めることができよう。それならば烏秣 (烏秣) 国は現在の奈辺に求めてよいであろうか。

私見によると、そのあたり一帯の長安里数 (前掲の表参照) は、単に諸国の配列を知る手掛りとしてのみ重要で、つまり表中にあげた里数は、諸国がどう姑墨と連絡していたかの報告に基いて作為されたものにすぎない。また烏墨里数は、多くの旅行者による報告を集めてはぎ合わせたものであって、それぞれに算定の基準や里数の算出法が異っている。それ

ならば、皮山・烏秣間の区間里数として皮山伝に見えている一三四〇里には、むしろかなりな重みをかけねばならない。もちろん、同じ伝文中に記されている皮山・姑墨間の区間里数一四五〇里とにらみ合わせての上である。こう考えを進めていくと、烏秣国の位置はヤールカンド河（ターリム河）の水系中に求めることはできないはずである。前漢書西域伝のこの国の伝文を見ると、この国は「山居して石間に田し」また「石を累ねて室をつくる」ほどの山中にあり、しかも「其の西に渠度あり」とわざわざことわってあるではないか。それならば烏秣国は、どうあってもギルギット河の東支フンザ（Hunza）河の谷としなければならない。

私が烏秣国をフンザ河谷に置く理由は、もうひとつある。上述の記事に比べて、やや力が弱いかもしれないが、私は北魏書西域伝に掲げられている次の二国の伝文に注目する。第一は阿鈎羌国の条で、この国が莎車の西南に存在すること、この国の西に渠度山があつて、四百里にわたる道程には往々に棧道があり、下は不測の淵に臨むこと、五穀や諸果を産するが、市では錢を用いていること、宮室もあり兵器もあつて、金珠を出すこと、などを書き綴つてある。渠度山の「山」字はおそらく衍字であろう。またここがキャラバン・ルートに當つていたことは、錢を用いるマーケットの存在から推測できる。第二に目を惹くのは、次文の波路国の条である。この国名がボロルの訳字で、ギルギット河谷に相当することは、すでに説いた。伝文によると、この国は「阿鈎羌の西北にあり」かつ「阿鈎羌と物産も国俗も同じ」であるという。

阿鈎羌がギルギット河谷の東に接したことは明白で、この点ですでに阿鈎羌はフンザ河谷とすることができようであろう。もちろん羌字は氐や羌と同じ意味で、ティベット種を指した文字であるから、その国名は阿鈎であつたにちがいない。この阿鈎を私は烏秣と同音異字と認めたいのである。「阿」と「烏」はほとんど同じであるうえに、鈎の正字は鈎で、音は「古侯切」である。烏秣の「秣」は唐韻で「宅加切」であるが、もしこれを「秣」の誤りと見れば「呼到切」で鈎に近い発音となる。またもし白鳥博士が主張されたように、後漢書の烏秣を正しいとすれば、「秣」は「好」字と同音であるか

ら、鉤に近い音といえる。しかし後漢書の成立は、前漢書のそれから四百年も遅れているから、私は烏秣をむげに烏耗の誤りとするには躊躇せざるをえない。もしどうしても烏秣に誤りを指摘するならば、むしろ最初から烏耗であったのを、編集のさい、あるいは伝写のさいに誤ったものと受取りたい。

このようにして私は、西域北道と西域南道とが、パミールの北端と南端とでそれぞれ二つに分かれて西行するほかに、もう一本の東西交通線が存在したことを明かにした。地図の上でそれを跡づけるならば、コータンの西のグーマのオアシス（皮山）からカラコルム山脈を越えてまずフンザの河谷（烏秣）に出る。次いで今のギルギットのあたりを通過して、山越えによってダレル河谷（陀歴）に達する。ここからインダス河の本流について西行しまた南行し、今のレシャーム・カラ（Reshām Qala）附近でインダスの本流と別かれ、西南に山行してスワート河谷（烏婁）に届く道である。この道がアフガニスタンに入って、ガズニ（烏弋山離）を通り、イラン南道となっていることは、すでに述べた。前漢書西域伝に示されている罽賓・烏弋山離道は、これほど大きな意義をもったわけである。

## 七

北魏書西域伝の序語を見ると「其の西域に出るに、本とは二道あり、のち更に四出となる。玉門より流沙を渡り西行二千里で鄯善に至るは一道たり、玉門より流沙を渡り北行一千（一に二千）里で車師に至るは一道たり、莎車より西行百（一に二百）里で葱嶺に至り、葱嶺の西二千三百里で伽倍に至るは一道たり、莎車より西南に五百里、葱嶺の西南一千三百里で波路に至るは一道たり」とあって、四道が指示されている。この一条は実に杜撰きわまるもので、しかも前の二道と後の二道とは知識として収得された事情を異にする。このことについて私は「董琬行使の再検討」（早大文学研究科紀要の第十四輯、また古代天山の歴史地理学的研究の補攷四）でやや詳しく論じておいたが、要約すると、第一の玉門関―鄯善

の道、第二の玉門関―車師の道は、けっして西域の南北道を告げたものではなく、董璇・高明の一行が往還への行程を伝えた一部分の採録にほかならない。また第三道と第四道は、この一行がおそらく疏勒（カシュガル）あたりで聞知した西域南道の山越えのコースであろう。したがって、ここでは第三道と第四道とが廻上にのぼる。

第三道に見えている伽倍は、北魏書西域伝のなかに独立の伝文があり、それには「伽倍国は、故の休密翎侯で和墨城に都す、莎車の西に在り、代を去る一万三千里で、人は山谷の間に居す」とある。この国については、すでに白鳥博士（西域史上の新研究）が唐史にいう護蜜すなわちワーカーンに比定した説があり、それに従うべきであろう。したがって前記の難兜国の位置とたいへん近い。次に第四道の波路については、これも別に伝が立てられている。このことはすでに紹介済みであって、波路がポロルすなわちギルギット河谷を指していることも明かにしておいた。

それゆえに、第三道の伽倍道はワーカーン河谷を経由するもの、第四道の波路道はギルギット河谷を通過するものと考えられる。これを紹介した北魏書西域伝の序語が、伝聞に基くとはいえ、両道がともに莎車（Yarkand）から発足し、葱嶺を西に越えるとしていながら、一は西を指し、一は西南に向っているとした点に注目する必要がある。もちろんそこに記されている里数は信用できないが、二道は莎車で分岐しているのである。それならば、第三道の伽倍みちは、明かに前漢書にいう莎車・子合・蒲犁・無雷・難兜を連ねて大月氏に向かう、いわば葱嶺南道にほかならない。そして第四道の波路みちこそは、皮山（ここでは莎車から行くことになっているが）烏秣を経てポロルを通り、罽賓に向かう、罽賓・烏弋山離道であって、北魏書の文中にいう葱嶺はカラコルム山脈と断定できよう。

北魏書西域伝の鉢和国の条に「二道あり、一道は西行して罽噠に向かい、一道は西南して烏菴に趣く」という一文がある。鉢和はワーカーン河谷。罽噠はエフタルで、アム河中流のバクトリアを指す。烏菴はいうまでもなくウジアーナすなわちスワート河谷である。しかしこの二道は、序語の伽倍みちと波路みちを指したのではない。ワーカーン河谷からバ

クトリアをめざす道は、明かに伽倍道にはかならないが、ワーカーンからスワート河谷（ウジャーナ）へと趣くものは、この河谷で分岐してヒンドウ・クッシュ山脈を南に越え、罽賓・烏弋山離道とボロルで合流するものであって、すでに紹介した法顯や智猛のたどった道である。また魚象の魏略に、西域の三道を指摘した記事があり、その南道として「玉関（玉門関）より西出し、婼羌を経、西に転じて葱嶺を越え、渠度を経、大月氏に入るを南道と為す」と書いてある。敦煌の玉門関から西にロブ地方の鄯善に至る間には、砂みち（Chol yol）と山みち（Tagh yol）とがある。ここにいう婼羌通過はおそらく二道のうちの山みちを取上げたのであろう。また葱嶺越えの記述にも混乱があつて、前記のようにワーカーン河谷で二分した道の一つがバクトリア（大月氏）に向かい、他が南下してギルギット河谷から渠度を経ているのを併せて書き記していると認められる。したがって文中に渠度という文字が見えていても、皮山から分岐する罽賓・烏弋山離道と比べて、必ずしも一体であつたとはいえないのである。

なお、前漢書西域伝の罽賓国の条には、杜欽が大將軍の玉鳳に説いた論策が載っている。そのなかに漢土からこの国に往復する途上に存在する地点として、大頭痛・小頭痛之山、赤土身熱之阪、三池、盤石阪、渠度が挙げられている。おそらく「三池」と「渠度」とを除いたほかは、普通名詞と受取つてよからう。三池をパミール南部に存在したものとすれば、大パミールには有名なヴィクトリア湖（Sar-i-köl）をはじめ、多くの湖沼があり、また小パミールでもアム河の上流のワーカーン河の源域、すなわちアク・スウの流れにそつておびただしい湖沼群が見出せる。そのなかには、玄奘や慧超が伝えているように、竜（Naga）伝説を帯びたものもある。しかし一方、北魏書西域伝の波知国の条には、明かに「三池あり」と書いている。それに従うならば、三池はヒンドウ・クッシュ以南、ギルギット河谷に近くなる。渠度がギルギット河谷からダレル河谷に進み、そこから道がそつていくインダス河本流の岸に比擬されることは、すでに解説した。こう案じてくると、罽賓国からの使者の帰途を護送する件で発言した杜欽の論は、その経路として葱嶺南道による大月氏への道

を指示していない。彼がその言論の末尾に、漢からの護送使は、宜しく皮山から還れ、と述べているのを見るがよい。罽賓・烏弋山離道の起点が、西域南道の皮山国にあったことは、明かではないか。

要するに北魏書西域伝の序語には、伽倍みちと波路みちとが紹介されている。しかし、この二道が新たに知られたために、前漢書の「二道」がこの時代には「四道」となったとする北魏書の説明は納得できない。二つの道は、前漢時代すなわち西方に関する知識がはじめて中国政府筋に明瞭に把握されるようになった時代から、すでに存在したといわなければならぬ。念のために、重ねてその二道をくりかえし説明しておく。前漢の時代にすでに西域には南道と北道とがあり、そのうち南道は、ヤールカンド（またはグーマ）から西行してタシユクルガンを通り、パミール高原の南部をアム河の上流にそってバクトリアへとたどっていた。つまり葱嶺南道となっていたといえる。これに対して、西域南道とグーマのオアシスでわかれ、カラコルム山脈を西に越えて、フンザ河谷、ギルギット河谷を經由してスワート河谷へと向かう別道があり、両道は「ワーカーンのパミール」と呼ばれている世界的分水嶺をはさんで、その北と南とに二つの東西交渉線を並べていた。法顯や智猛の足跡によって窺えるのは、この平行する二つの東西交通路を中間のワーカーン河谷とギルギット河谷とで結んでいた連絡線にほかならない。

## 八

およそ古道の研究というと、甚だ特殊な問題のように扱われがちであり、あるいは大勢に影響をもたない末節の問題のように考えられがちである。なるほどそのような場合もある。しかし東西文化の交流を目標とするような研究になると、これほど基本的な問題はないといってよい。というのも、すでに述べたように、文化の伝播はけっして偶然や唐突に起るものではなくて、必ず隊商や船舶による交易を前提とする。しかもこのような交易は、両地での人々の生活様式を素



地として成立しているからである。

西域つまりターリム盆地の諸オアシスの文化は、均一性をもっていない。それゆえにこそ北道の文化と南道の文化とは、しばしば対比して説かれている。亀茲語と于闐語との本質の比較もそれである。亀茲の小乗教と于闐の大乗教、あるいは亀茲の石窟寺院の壁画と于闐に残っていた板絵との比較もまた好い課題となる。こうした南北の差違について、在来の説明は、南北の両道がその中間に広大きわまりない砂漠地帯（タクラマカン砂漠など）を横たえ、とかく往来が疎遠であった点に終始している。外方から働きかけた文化のちがいは、当然考慮されている。しかし理由はそればかりではないであろう。于闐すなわちコータンのオアシスが、西域南道の中心勢力であり、南道文化の焦点であったとともに、その西隣の皮山（グーマ）で鬪賓・烏弋山離道に結んでいたことを見通してなるまい。この道によってインド文化はコータンに直結していたといえる。藤田博士の研究（東西交渉史の研究・西域篇）によれば、コータン北郊の砂漠に埋まっていたダンダーン・ウィリーク（Dandan-nilik）は、トルコ語で「象牙の家」を意味する。そしてそれは、玄奘（大唐西域記）が伝えた跋虜沙城（Purushapura）東北二十余里の彈多落迦（Dantaloka）山、曇無竭の檀特山、恵生の善特山と梵語で同じ意味をもつという。ガンダーラ地方で最大と頌われた仏寺の名が、ターリム盆地のコータン地方で、トルコ語に変えられつつも、行われていたことは、その点でもまことに意義の深い現象といわなければならない。

（昭和四十六年二月二日）